

第 21 回国際ガラス会議 (ICG) 参加報告 - 2

日本電気硝子株式会社技術部

山田 朋子

Report on the International Congress on Glass XXI - 2

Tomoko Yamada

Nippon Electric Glass Co., Ltd. Technical Division

7/1~7/6, 第21回国際ガラス会議がフランスのストラスブルグで開催された。私にとっては、前回の京都に続いて2回目のICG参加となった。3年前の京都開催のとき、私は修士課程2年でポスター発表をした。日本でポスターなので、特に緊張もしなかった。今回は違った。海外で、しかも口頭発表。発表させてもらえることになったときは嬉しかったが、あまり海外旅行をしたことがなく、英語が苦手な上、準備がギリギリまでかかっていたこともあり、日が近づくにつれ不安ばかりが募り、正直行くのが嫌になっていた。しかし、実際に学会に参加し始めると、いつの間にか不安はなくなり、楽しんでいる自分がいた。もちろん自分の発表のときは緊張したが、興味のある発表を聴きに行ったり、学会が終わってから（夜10時くらいまで空が明るかった）はストラスブルグの街を散策したりと、出国前には想像もしてないくらいに楽しめた。

ストラスブルグに着いたのが7/1の夜だったので、Welcome Receptionには出席できず、7/2からの参加となった。Opening Ceremony

は当然ながら一番広い会場で、自分の発表がそこではないことを確認して安心した。

Opening CeremonyのあとのRound Tableでは、ガラス会社の代表による講演が行われた。今まで、海外のガラス会社の事業紹介を聴く機会がなかったので新鮮だった。講演タイトルが“Glass products for the future”なので、新しい（未来の）ガラスばかりかと思っていたが、Schott社の講演では既存のガラスをどう生かすかという内容に重点が置かれており、Corning社の講演では研究開発のスタンスについても述べられており、各社の今後の開発への取り組み方を垣間見ることが出来た。今あるものの生かし方、現在の問題への取り組みなどを考えていくこと全て含めて“future”なのだと感じた。

自分の発表が7/6、つまり最終日だったので、それまでは発表を聴きに回った。（前回は受付などの手伝いが入っていたため、あまり発表を聞くことが出来なかった。）全く未知の分野は聴いても理解が困難と思ったので、学生時代の研究分野・現在の研究分野に近いものばかりとなり、偏った感はあるが（もっと幅広く知識をつけなければならないと思う）、それでも様々な大学や企業の研究を知ることが出来たり、参加者と話が出来たりして良い経験になったと思

〒520-8639 大津市晴嵐二丁目7番1号

TEL 077-537-1381

FAX 077-534-3572

E-mail: tmyamada@neg.co.jp

う。聴きに行った発表は偏ってしまったが、セッションはバラバラで、会場間を早歩きで移動した。到着したら会場が変更されていたり、10分くらい遅れていたたり、キャンセルということも多々あった。ポスターを見ても、口頭発表を見てもキャンセルが多いような気がした。期待していた発表のいくつかが見られなかったのは残念だった。

もっとも多く聴いたのはガラスの構造に関するものだった。大学時代にシリカガラスの研究をしていたこともあり、プログラムの中でも特にシリカガラスやケイ酸塩ガラスの構造に関する発表が目にとまった。手法はRamanやXRDなどで特に変わったものではないが、構造といっても高温下や高压下での構造変化、構造欠陥など様々であった。 SiO_2 という単純な組成であるにも関わらず、その構造について研究・議論が行われており、シリカガラスの奥深さ・魅力を改めて感じた。

Thermodynamicsのセッションも度々行った。現象としては興味があるものの、数式を多く使った理論的な説明になると全くついていけなくなり、自分の知識の乏しさを思い知った。このセッションで、たまたま私の聴講中に、ちょっとしたトラブル(?)があった。発表の最中に質問(反論)する人があらわれたのだ。発表の半ばで発表者と質問者の間で議論となり、チェアマンが一旦場を治めたにも関わらず、次の発表でも同じ人が発表途中で口を出し、チェアマンが半分怒って注意していた。見ているほうとしては苦笑いしつつも面白がっていたが、発表者としては災難だったと思う。(海外の学会ではよくあることなのだろうか?)

私見で恐縮ながら、今回聴講した発表の中で、印象に残っている発表を2つ簡単に紹介したい。

1つは、セッションR(New glasses for thermomechanical applications)のB. G. Altken氏の発表である。内容は低融点ガラス全般につい

ての話であった。“低融点”の起因となる構造的要因、主な低融点ガラスの組成と特性から、シールガラス(フィラーを入れる効果)や光学ガラスとしての応用など、低融点ガラスについて基礎から学べる、わかりやすい発表であった。

もう1つは、セッションC(Computer simulations of glass structure and properties)のA. Takada氏の発表である。内容はシリカや四面体ネットワーク構造を有するガラスの加熱に伴う局所構造の変化のシミュレーションで、内容がとても興味深かったのだが、それ以上に発表の手法に惹かれた。オーケストラになぞらえていて、遊び心を取り入れつつ大変わかりやすかった。前日はレストラン風だったと発表の最初におっしゃっていて、それもぜひ拝聴したかった。

ポスター発表を回ったときは、口頭発表よりも発表自体をゆっくり見ることが出来て、発表者(がちゃんと立っていてくれたら)と話せて、口頭発表にはないポスター発表の長所だと思った。

さて、肝心の自分の発表について。

発表の最初のほうは足が震えていたくらい緊張していた。それでも、今までの国内の学会と同じように、マイクは使わずに発表した。声を出せば緊張は収まると思ったのだが、あまりおさまらなかった。正面を向いたときにICGで知り合った人たちが座っているのが見えて、少し緊張がほぐれた。発表が始まってからは、断片的にしか覚えておらず、自分がしゃべったという感覚があまり残っていない。練習でよく間違えたところでやっぱり間違えたと気付いた記憶があるので、原稿はしっかり頭に入っていたし、ちゃんと発表はできたのだと思う。今まで国内の学会で何回か発表してきたが、ここまでは緊張しなかった。今思えば、なんでそこまで緊張していたのだろう。

質疑応答では、2つ質問が出た。1題目は理

解できたが、質問の意図がわからず、四苦八苦して答えたら納得して(?) もらえた。2 題目は単語の意味がわからず、周りの人やチェアマンに助けていただいたにも関わらずうまく答えられなかった。



発表中の筆者

英語での発表ということもあり、緊張しすぎたこと、質問に答えられなかったことは悔しくもある。「初めての海外発表だったから」で終わらずに、今回の経験を活かして、次の機会にはもうちょっと成長して、余裕のある発表にしたい。

ICG 全体を通して、自分の英語力不足を痛感した。他の人の発表を聴きに行ったときに、口頭発表で聞き取れなかったり、ポスター発表でも聞きたいことを英語でうまく言えなかったりと、せっかくの機会なのに英語力不足で歯痒い思いをすることが多かった。英語をもっと勉強しなければと改めて思った。それでも、いろいろな発表を聴けたことや多くの人と交流を持てたことは自分にとって大きな財産になったと思う。今回の経験や感じたこと、良かったことも悪かったことも全て含めて、今後に活かしていきたい。